

平成三十一年二月一日発行 第二十九巻第二号 通巻第三三二号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐 かい

岡井省二創刊

平成31年2月号

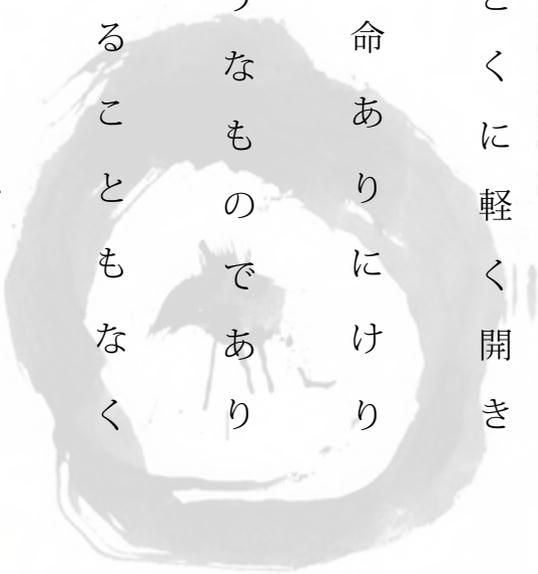


無垢の命

高橋将夫

まだ無垢の命に掛ける布団かな
なまはげの後ろ姿の淋しさよ
返事する前に襖の開きにけり
人類の繁栄勤労感謝の日

核 実 験 冬 の 銀 河 が 凍 結 す
冬 う ら ら 孫 の 玩 具 は 銃 と 剣
白 障 子 羽 根 の ご と く に 軽 く 開 き
枯 葉 に も 枯 葉 の 命 あ り に け り
命 と は 焚 火 の や う な も の で あ り
熱 爛 や 命 を か け る こ と も な く
晩 年 に ほ ど よ き 冬 の 日 ざ し か な



槐安集

水野恒彦

鷹を得て峯の大樹とあそびけり
凍裂に森ことごとく香を断ちし
砂漠の夜は触れんばかりに冬銀河
無バツハよ雪の夜の深さかな
枯芒光年といふ美しき距離

加藤みき

生牡蠣や大き反省一つある
桐一葉かろやかに舞ひ舞うて
小鳥来る子連れの鳥とすれ違ひ
ここに立ち白膠木紅葉に出合ひたる
あたたかき神農さんとなりゐたり

中島陽華

ヒートテックは便利なものよ穴惑
あかときの歌届きをり石榴の実
獅子柚子がでんとナースステーション
顔出すは八日月なりくぢら帯
柿乗せて四条の橋の乳母車

竹内悦子

三門や色なき風に出逢ひたる
霜月の真つ白な皿洗ひをり
煮凝りや鯛の眼のうるうる
秋晴の厨に大き光の輪
三門の龍の目覚めや照紅葉



雨村敏子

うそ寒の窓辺に何か光るもの
日の方に立冬の背ナ伸ばしけり
錦秋の池に映りし月日かな
石露開くわが晩節の深まりに
星の森菌の増ゆる音のする

近藤喜子

水たたたく鴨の羽ばたき若きかな
ほこほこと身に溜まりたる冬霞
色々とあり冬蝶となりしまで
冬の雲たれこめ天と地の近し
生きるため生まれてきたる冬銀河

本多俊子

芒原少年銀の風となる
切能きのうの笛のうるほひ十三夜
もののふの声かと風の枯芭蕉
鬼の子やうれしき時は空をみる
満願の色となりたる烏瓜

瀬川公馨

秋水に蛇の泳ぎを見たりけり
酔に浮ぶ茗荷は花を付けたまま
秋入日の時空の炸裂ありにけり
晩秋の庭に出で来しアライグマ
腰折れの短歌ばかりや暮の秋

柳川 晋

落陽の一太刀躲す冬紅葉
メキシコの国境沿ひの懸大根
鬼の子の難民申請断はられ
跡もなく傷ものこさぬ鎌鼬
付度をしなかつたのね捨案山子

熊川 暁子

粧ひて山はカメラに向ひをり
身に入むや風の軽さと日の軽さ
水の肌理^きすり込^めむごとく芋洗ふ
木ささげの枯れたる空の鳴りにけり
野原から一步も出ずに枯れてゐし

寺田 すす江

丘陵を雑木紅葉の色つづく
今朝の冬いやに鴉の鳴きにけり
初しぐれ前方後円墳さびし
山里やあはれを誘ふ鹿の声
冬ざくら空の碧さと競ひをり

岩下 芳子

太刀魚の銀を纏うてロックンロール
珈琲の無糖微糖や日向ぼこ
ボール蹴つて釣瓶落しのスタジアム
渋抜けて垢抜けてきし柿の色
本膳や紅菊黄菊甘酢和

有松洋子

初冬や瓦斯の火の蒼濃くなりて
父と子の胸襟ひらく爛の酒
夕日甘しと鴉が啜る木守柿
傷みつつ澄みゆく時間冬紅葉
凧のおのれ研ぎゐる勁さかな

岩月優美子

索道の押し上げてゆく冬紅葉
鷹舞うて海の青さの広がりぬ
北塞ぎ物思ふこと多かりし
狐火や我が小心を炙り出す
夫々の生き様見せて木の葉散る

近藤紀子

初冬の雲が雲追ふ檜田山
ぼたん鍋奉行の口も手も動く
高鳴りはやがて木の實の降る音に
冬ぬくし右ポケットに指十本
柩には曼珠沙華の白いつぱい

竹中一花

立冬や骨うづくまで人を待つ
嘘寒の町家の奥に畏る
冬の戸を開けし神々森の朝
閑伽石をまはる風音冬に入る
鳳と凰隠して速き冬の雲

前田美恵子

人影を恋うてや鯉の水澄める
頬を打つ木の実ひとつの痛さかな
頬被取りて役者のにらみかな
重さうに陶の狸の新酒提げ
小春日や山羊のひずめの開きたる

中田禎子

金風や武士のこゑ樹々にある
秋蝶の松の天辺ゆきにけり
新雪の遠山 大き樽 洗ふ
あの山の向かふは大和蒲団干す
菊焚く火全て紫煙となりにける

吉田順子

太筆の墨跡蒼く冬立てり
天平の双塔の影冬はじめ
嵯峨菊の細きをつなぐいのちの緒
小春日や樹海をわたる鳥の影
栃の実に力感のあり未来あり



槐市集

大塚たきよ

長き夜の気儘なりけり白むまで
冬立つや姦し年増の湯屋のれん
長き夜の救急車の音夜もすがら
休耕田のコスモス吹かれ星明り
塾帰り母子の語らひ冬の月

岡田桃子

炙る焼く果ての炭火を囲みをり
黒猫や炭火の七輪半円巻き
小春日の森行く人は話し好き
小春日の松の菰巻き目の高さ
一句成し二度寝に入る夜長かな

荻布 貢

岡崎の冬めく庭に象の声
リズムカルにカーリーヘアの雪女郎
満喫のスキーゲレンデ筋肉痛
立冬やタイヤセールの幟立つ
神渡オセロゲームの裏表

久保夢女

潮騒の通ふ故郷青レモン
柚子しぼり母特製のちらし寿司
霜月のついたち鯛の生きの良さ
先触れは一陣の風木の葉散る
着ぶくれて右脳も左脳も休眠中



古賀恵子

朝露や疎水を小舟出発す
国際色豊かなりけり七五三
マツト背に岩登りとや小六月
濃霧出で車窓にスマホ一斉に
楽しみの次々浮かぶ夜長かな

阪倉孝子

流れ行く夕日の名残り浮寝鳥
逝く秋へ追ひ立ちてゆく千羽鶴
深秋の光の中を野辺送り
野佛は丸き石なり開戦日
白湯飲みて透けゆく心今朝の冬

柴田靖子

冬きざす万物のみな囲いに入る
かいつむり水辺ゆたかにしておりぬ
ゆつくりと実り深くす蜜柑かな
枯蟪蛄しかと未来をたくしゆく
月冴ゆる古人もながめしか

庄司久美子

小春日や倭坐りの観世音
谷川浜風の音柔らかし留守の宮
大原女の昔話や冬うらら
ようこそと百味供養会冬の蝶
狛犬をのぼる蟪蛄日本晴

杉原ツタ子

身に入むや泉の水を壺中へと
菊の香と葬りの庭の鳶の笛
幻日や小島の朝と蜜柑山
神無月さらりと兄を攫ひけり
内海の冥加の風と石路の花

高野昌代

飛鳥路の追つかけてくる草風
わが庭の蟋蟀一つ汝が天下
生駒山きのふの霧を被りしか
汝が腕を杖の代わりに十夜婆
金太郎の飴とけるまで日向ぼこ

槐集

高橋将夫選

秋風と共に去りぬる澱みかな
大阪 江島 照美

色変へぬ松の元には寄生根
身の秋のどうにもならぬ二籠り
退屈の底に夜霧の落ちてくる
そぞろ寒読経の前の粉葉
振り返り見れば明るき枯野かな
岡崎 犬塚李里子

九十年何して来たか日向ぼこ
プランターほどの幸せ冬すみれ
運不運のり越えて来し手毬唄
着ぶくれて内なるものを覆ひけり
言ひ訳も繰り言もなし破芭蕉
竹原 久保 夢女

深む秋思ひとコトコ独り歩きす
小春日や地球に抱かれぬる心地
かさぶたのごとき欲心冬に入る
影と化し十一月を釣る男

鷹柱立ちし地をいま神の旅
守口 三木 亨

落葉踏む音の乾きに個を深め
冬の蝶きれいに生きてきれいな死
生き様の跡形もなし落葉焼く
災害の年をちこちに帰り花
美しき準備の時間冬木の芽
大阪 藤田美耶子

わくら葉に流れ変へたり秋の水
孤独こそ自由の翼天の鷹
この国の劣化すすみぬ鳥渡る
ちちろ啼く楽器にまさるセレナーデ
廻されて後は自力や木の実独楽
大阪 平野 多聞

紅葉寒かたちなきもの胸に棲み
生涯の誤算も良しや葛湯溶く
修道院に寒月光のひたひたと
つまらないプライド捨てて枯蟻螂

銀河往來

◆槐集観照

身の秋のどうにもならぬ二籠り

江島 照美

一つの繭が二つの蛹を抱えているように、二つの思いを身の内を抱えているという。まあ人は大なり小なり矛盾を抱えて生きていくものだが。

一方、〈秋風と共に去りぬる澁みかな〉の句では、澁みが消え去って水が澄んできたという。心も澄んできたという。

〈色変へぬ松の元には寄生根〉の句、松は常緑樹で常に青い。そんな松に寄生する根がある。これもまた自然の摂理。

〈退屈の底に夜霧の落ちてくる〉の句は退屈というものの本質に迫る。五里霧中、はたまた「小人閑居し」か。

これらの句に対し、〈そぞろ寒読経の前の粉薬〉の句には江戸俳諧的な雰囲気があつておもしろい。

運不運のり越えて来し手毬唄

犬塚李里子

運不運を乗り越えてきた来し方をしみじみと振り返っている作者。その懐かしく、いとおしい思いが季語の手毬唄に託されている。

〈振り返り見れば明るき枯野かな〉とへ九十年何して来たか日向ぼこと〈プランターほどの幸せ冬すみれ〉とへ着ぶくれて内なるものを覆ひけり、どの句もしみじみと人生を見詰めていて、作者の穏やかな心境がよく伝わってくる。

言ひ訳も繰り言もなし破芭蕉

久保 夢女

「言ひ訳も繰り言もなし」の句、たしかに破芭蕉にはそんな

風貌がある。

〈かさぶたのごとき欲心冬に入る〉は欲心の本質に迫る。

〈小春日や地球に抱かれあひる心地〉はおおらか。

鷹柱立ちし地をいま神の旅
格調の高い精神の風景。立句。

三木 亨

〈災害の年をちこちに帰り花〉の句、災害と返り花に因果を感じさせられる。

〈冬の蝶きれいに生きてきれいな死〉には、死が美しく詠み込まれている。

美しき準備の時間冬木の芽

藤田美耶子

冬木の芽に対して「美しき準備の時間」が絶妙の措辞。〈わくら葉に流れ変へたり秋の水〉の句、病葉にも水の流れを変える力が残っているのだ。

〈孤独こそ自由の翼天の鷹〉もことの本質を捉えている。

廻されて後は自力や木の実独楽
木の実独楽は人の手で回されるから他力だが、どれだけ長く回るかは独楽次第だから自力だという見方が面白い。

平野 多聞

〈生涯の誤算も良しや葛湯溶く〉、へつまらないプライド捨てて枯蟻螂は身入る。

掘り起す芋に新芽の力ある

中 貞子

掘り起す芋に新芽の力を感じるの、日ごろ土に親しんでいるからこそと思う。〈以下略〉